

開始を表す複合動詞「～出す」「～始める」の違い —コーパスを利用した使用実態から—

池谷 知子

神戸松蔭女子学院大学 言語科学研究所

tikeya[at]shoin.ac.jp

Difference between the Japanese Compound Verbs “～Das” and “～Hajime”: A Corpus-based Study

Tomoko IKEYA

Kobe Shoin Women’s University Institute of Linguistic Sciences

Abstract

統語的複合動詞「～出す」と「～始める」は、両方とも開始の aspekto を表すものとして知られている。この2つは言い換えがきくものされてきた。先行研究ではこの2つの違いとして、「～出す」の方は「突然性」があるとされてきた。これまで、複合動詞の用法については、作例で検証されることが多かったが、本研究では「現代日本語書き言葉均衡コーパス（通常版）中納言 BCCWJ-NT」を使うことによって、「～出す」と「～始める」の違いを、数量と実例を使った観点から明らかにしていく。そして、「～出す」と「～始める」の違いには、動詞の限界性と動作主のコントロール性という2つの要因が関与していることを論じる。そのことによって、「～出す」と「～始める」の表す開始のスペクトルの違いを明らかにする。

The syntactic compound verbs “～das” and “～hajime” are both known as aspectual (auxiliary) verbs that express the start of an action. Previous studies analyze the difference between these two verbs by examining examples composed by researchers, and it has been regarded that these two verbs are interchangeable, whereas “～das” often indicates an action that happens suddenly. This paper is intended to clarify the characteristics of the verbs “～das” and “～hajime” by investigating real sentence examples from the Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese, and argues that the difference between the two verbs can be explained by the two factors: delimitivity and controllability.

キーワード: 統語的複合動詞 語彙的複合動詞 アスペクト複合動詞 限界性 コントロール性 未完了の逆接

Key Words: syntactic compound verbs, lexical compound verbs, aspectual compound verbs, delimitivity, controllability, imperfective paradox

1. はじめに

「降り出す」「降り始める」のような V1 + V2 型複合動詞はそれぞれ開始のアスペクトを表す形式として知られている。そして、しばしばそれらの意味の違いが問題となっている。例えば、新美他 (1987:76) 『外国人ための日本語 例文・問題シリーズ④複合動詞』には次のような問題がある。

三 () 内の動詞に「はじめる」か「だす」を加えなさい。過程のはっきりしたのものには「はじめる」をつかいなさい。

- ① かおるちゃん、もう歯が(出る)たようね。
- ② 中年になって、ちょっと(太る)たような気がするんだ。
- ③ そろそろ卒業論文を(書く)なければならないな。
- ④ ピアノを(習う)たころ、子供が十年も続けるとは思いもしなかった。
- ⑤ 女の子は警官の顔を見て、わっと(泣く)て、母親にしがみついた。
- ⑥ 私は、この大学で(教える)てから、十年になります。
- ⑦ 宿で寝ていると、天井で突然ねずみが(あばれる)てびっくりした。
- ⑧ それを聞いて、彼は急に(あわてる)て、落ち着かなくなった。
- ⑨ 今すぐ行きますから、皆さんに先に(食べる)ていてください。
- ⑩ この辺りは冬が早く、十月になるともう雪が(降る)ます。
- ⑪ 突然家が(揺れる)てびっくりした。自身は初めての経験だったから、すごく怖かった。
- ⑫ 遊園地に連れて行ってやると言ったら「嬉しいな、嬉しいな」と言って、(踊る)た。

この問題の指示文にある「過程のはっきりしたのものには『はじめる』をつかいなさい」の部分削除して、日本語母語話者にやってもらうと、実際の解答¹と異なる答えがみられた。つまり、この問題は、過程という時間がかかることがコンテキスト上で保証されているものには、「～始める」を選択させることを誘導しているのである。そのため、それを削除して、直感に従って自由に選んでもらうと、解答とは異なる答えになる場合がみられた。また、「～始める」か「～出す」をつけなさいという指示にも関わらず、「④習いはじめる/習いだす」、「⑩降り始める/降りだす」のように両方の答えを可とした問題が12問中2題もあった。

¹①出はじめる、②太りだす、③書きはじめる、④習いはじめる/習いだす、⑤泣きだす、⑥教えはじめる、⑦暴れだす、⑧あわでだす、⑨食べはじめる、⑩降り始める/降りだす、⑪揺れはじめる、⑫踊りだす

もちろん、両方とも開始の aspekto を表す複合動詞とされているものなので、両方の形式で言えても不思議ではない。しかし、これ以外にも両方の形式が取れると思われるものがある。例えば、もう一度、問題②をみてみよう。

- (1) a. 中年になって、ちょっと太りはじめたような気がするんだ。(正答)
 b. 中年になって、ちょっと太りだしたような気がするんだ。(誤答)

(1a) が正答とされているが、(b) は非文なのだろうか。実際に調べてみると筆者も含めて、(b) でも言えるという人もおり、この答えが自然な言語直感に従った解答ではないことことをうかがわせる。それでは本当に「太り出す」が言えるかどうか確認するため、「現代日本語書き言葉均衡コーパス (通常版) 中納言 BCCWJ-NT (以下コーパス中納言と略す)」²で検索してみると次のような例が見つかった。

- (2) 運動不足になると犬はてきめん太りだし、体が重たくなると、さらに動きたがらなくなります。(『ウェストハイランド・ホワイト・テリア』誠文堂新光社 2001)
 (3) そこで、病院で投与を受けることになりましたが、今度はその副作用で、やせた体がまた急激に太りだしました。(藤野武彦『BOOCS ダイエット』朝日新聞社 2005)

このように、「太り出す」が絶対的に言えないというわけではない。このことから、過程がはっきりしたものには「～は始める」が使われるという説明だけでは、「～出す」と「～始める」の違いを明らかにするには十分ではないことがわかる。

影山(1993)において、統語的複合動詞と語彙的複合動詞が提案されてから、姫野(1999)、伊藤・杉岡(2002)と複合動詞について多くの研究がなされてきた。ただ、それらの研究では、コンテキストから切り離された複合動詞のみが扱われることが多かった。そこで、本研究では近年、めざましく進歩したコーパス研究の知見を利用しながら、開始を表す統語的複合動詞と言われている「～出す」と「～始める」の違いについて論じていく。

2. 先行研究 ～影山(1993)の統語的複合動詞と語彙的複合動詞～

影山(1993)、影山(1999)、影山(2012)では複合動詞には「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」の2種類があることが指摘されている。

影山(2012:3-4)

a 語彙的複合動詞

後項動詞(V2)が直接、前項動詞(V1)の連用形に結合する。すなわち、2つの語彙範疇が直接的に複合であるという点で「語彙的」である。

²『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)は、現代日本語の書き言葉の全体像を把握するために構築したコーパスであり、現在、日本語について入手可能な唯一の均衡コーパスである。書籍全般、雑誌全般、新聞、白書、ブログ、ネット掲示板、教科書、法律などのジャンルにまたがって1億430万語のデータを格納しており、各ジャンルについて無作為にサンプルを抽出している。http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/

b 統語的複合動詞

V2は、直接、V1の連用形に付くのではなく、V1を主要部とする補文（幾つかのレベルの動詞句）を取る。すなわち、統語的な句に付くという点で「統語的」である。

これらの具体例として、以下のような動詞があがっている。

影山（1993:75）

a 語彙的複合動詞

飛び上がる、押し開く、泣き叫ぶ、売り払う、受け継ぐ、解き明かす、飛び込む、（隣の人に）話かける、こびり付く、飲み歩く、歩き回る、踏み荒らす、褒め讃える、語り明かす、聞き返す、震え上がる、呆れ返る、持ち去る、沸き立つ

b 統語的複合動詞

払い終わる、話し終わる、しゃべり続ける、食べすぎる、食べそこなう、助け合う、動き出す、食べかける、しゃべりまくる、走り抜く、数え直す、見慣れる、登り切る、やりつける

また、影山（1993:96）では「到着し始める」と「印刷し出す」を例にとり、「～始める」と「～出す」の両方を「始動」を表す統語的複合動詞としている。統語的複合動詞とされるものには「始動」「継続」「完了」など、アスペクトに関わる表現が多く含まれており、統語的複合動詞と語彙的複合動詞は、以下の5つのテストのよって、区別される。そのテストの振る舞いを確認する。（それぞれの例は影山（1993）からの抜粋である）

<統語的複合動詞と語彙的複合動詞を区別するテスト>**a 代用形**

- ① そうし始める（統語的）
- ② *そうし歩く（語彙的）

b 主語尊敬語

- ① お歌いになり始める（統語的）
- ② *お書きになり込む（語彙的）

c 受身形

- ① 名前が呼ばれ始めた（統語的）
- ② *書かれ込む（語彙的）

d サ変動詞

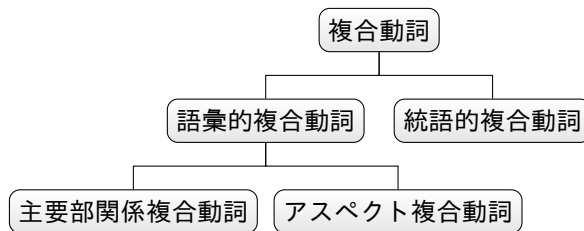
- ① 徹夜で見物し続ける（統語的）
- ② *沸騰し立つ（cf. 沸き立つ）（語彙的）

e 重複構文

- ① 大臣はそれをひた隠しに隠し続けた。(統語的)
 ② *行方不明の子供を探しに探し歩いた。(語彙的)

このように、影山(1993)では複合動詞を語彙的複合動詞と統語的複合動詞に分類し、その成果は広く知られている。しかし、影山(2012)では語彙的複合動詞をさらに2つに分類し、語彙的複合動詞が、更に「主要部関係複合動詞」と「アスペクト複合動詞」に分類できることを提案した。影山の分類を図にまとめると次のようになる。

図 1: 影山(2012)の複合動詞の分類



主要部関係複合動詞は「V1, V2 ともに主題関係(項関係)を持ち、V1 は V2 を様々な意味関係で修飾する」とされている。一方、アスペクト複合動詞は、「文の項関係は基本的に V1 によって決まる。V2 は広い意味で語彙的アスペクトを表し、V1 が表す事象の展開について述べる」とされている。

影山(1993)の統語的複合動詞の中には、アスペクトに関するものが多く含まれていたが、影山(2012)では、更に語彙的複合動詞の中にもアスペクトに関するものがあることが指摘されている。それでは、語彙的アスペクト複合動詞の特徴はどういうものだろうか。それに関して、「～出す」「～始める」を例にとって、詳しく述べられているため、少し長いですが、そこからの引用を行う。

影山(2012:13-14) (原文では下線で表されたものはゴシックで示す)

アスペクト複合動詞は、従来の語彙的複合動詞の意味分類においても難しい分類である。このグループは影山(1993)、由本(2005)の「補文関係」、松本(1998)の「副詞的關係」を包摂し、また、伝統的な国語学・日本学においては、元の動詞の語彙概念とは異なる意味(特にアスペクト的な意味)を表すため、「補助動詞的」と言われるものである。ただし、日本語学においては、形態論の領域と統語論の領域の区別が実質的には欠如しているため、「補助動詞」は「しゃべり始める」「しゃべり終わる」のような統語複合動詞の後項も含まれる。例えば、寺村(1985:169)は(6)の3つの例文について、(6b)の「出す」と(6c)の「出す」も共にアスペクトを表す補助動詞と考えている。

- (6) a. 虫を箱からつまみ出した。(動詞+動詞)
 b. 虎がおりから逃げ出した。(動詞+補助動詞)
 c. 赤ん坊が泣き出した。(動詞+補助動詞)

しかしながら、影山(1993)が提唱する統語的複合動詞と語彙的複合動詞の診断基準になると、両者には明確な文法的相違があることが分かる。すなわち、統語的複合動詞は、V1に受身形、使役形、「そうする」代用形、「VNする」などが来ることができるといふ特徴を持つが、(6c)の「泣き出す」がこれらの特徴に適合するのに対して、(6b)の「逃げ出す」は統語的複合動詞の特徴を示さない。

(中略)

その結果、我々は一見相反する(ア)と(イ)の主張に直面することになる。

(ア) (6b)と(6c)の「出す」はどちらもアスペクトを表す補助動詞である。
 [寺村]

(イ) (6b)は語彙的、(6c)は統語的という文法的な相違がある。[影山]

この矛盾を無理なく解決する方法は(6b)を語彙的な複合動詞であるが、アスペクトを表すと捉えることである。すなわち、従来の一般的な考えに反して、アスペクトを表す補助的な動詞は、統語構造にも語彙構造にも存在するということである。

影山(2012)では語彙的アスペクト(Aktionsart アクツィオンズアルト; 動詞の様態(manner of action))とは、完了、未完了といった時間的なアスペクトに限られず、広く「事象の展開の仕方」を表す概念とし、これらを **Lexical-aspect (L-asp)** と名付けた。その中で特に時間的なアクツィオンズアルトとして、次のようなものをあげている。

影山(2012:17-18)から抜粋

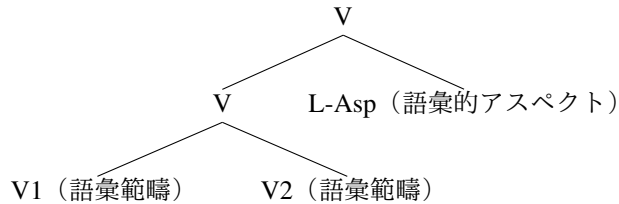
<時間的アクツィオンズアルト>

- 完了…「縫い上げる」「縫い上がる」
- 変化の強調…「寝込む」「澄みきる」「静まりかえる」「住みつく」「震え上がる」「咲き乱れる」「落ち着きはらう」「照りつける」
- 開始ないし開始の試み…「切りつける」「立ちあげる」「咲き初める」
- 継続…「泣き暮らす」「降りしきる」
- 反復・多回性・習慣…「ほじくり返す」「使い込む」「言い習わす」
- 動作の強調…「さわぎたてる」「こきおろす」「いじくりまわす」「沸きかえる」「沸き立たつ」「褒めちぎる」「吹きすさぶ」
- 複数事象の相互関係…「溶けあう」「居あわせる」「聞きかえす」

- 行為の不成立…「履き違える」「貸ししぶる」「伸び悩む」

そして、これらの語彙的アスペクトの構造として [語彙範疇 (V1) - 語彙範疇 (V2) - 機能範疇 (L-asp)] という順序になるとして、図 2 (p. 41) のような構造を想定している。

図 2: 影山で想定されている語彙的な複合動詞の構造 (影山 (2012:28) を改編)



そして、このような接続になる証拠として、次のように 3 つの動詞が連なる例をあげている。

- (4) 干あがる (V + L-asp)、干からびる (V + V)
 (ア) → 干-からび-あがる (V + V + L-asp)
- (5) 寝静まる (V + V)、静まりかえる (V + L-asp)
 (イ) → 寝-静まり-かえる (V + V + L-asp)

このように、語彙的複合動詞が 3 つ連なる時、語彙的アスペクト (L-asp) が最後にくることがわかる。つまり、[V1 + V2] + L-asp という順に相互承接していることがわかる。それでは、語彙的なアスペクト複合動詞と統語的なアスペクト複合動詞の関係はどのようなものだろうか。それについて、影山は以下のように述べている。

影山 (2012:44) (ゴシックは筆者)

本稿で提案したアスペクト複合動詞は、あくまで「語彙的複合動詞」の一部であり、「～し始める、～し続ける、～し出す、～し損なう」といった統語的複合動詞と同一視することはできない。すなわち、日本語の「動詞連用形 + 動詞」型の複合動詞には 3 つのカテゴリーが共存していることになる。

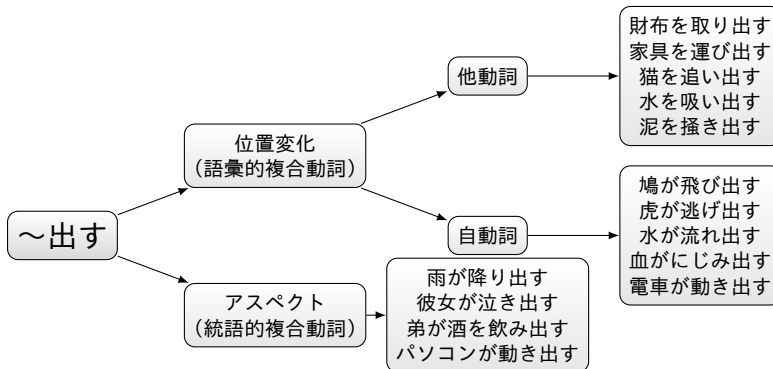
- (49) 語彙的な主題関係複合動詞 (V1 と V2 が直接結合する)
- |
- 語彙的なアスペクト複合動詞 (V1 と V2 が直接結合する)
- |
- 統語的複合動詞 (V2 は V1 を主要部とする動詞句を取る)

3. 語彙的複合動詞「～出す」と統語的複合動詞「～出す」

前章で「～出す」は統語的複合動詞であると述べたが、実は、「～出す」には語彙的複合動詞と統語的複合動詞の2つの用法があることが知られている。

陳(2012:51)では、語彙的複合動詞は位置変化を表し、統語的複合動詞は開始のAspectを表すとして、次のようにまとめられている。

図3: 「～出す」の意味と用法 陳(2012:51)を改編



陳(2012:36)では統語的複合動詞と語彙的な複合動詞の構造を図4(p.43)のように想定している。

それ以外にも「～出す」の意味については森田(1989) 姫野(1999)など数多くの先行研究がある。その代表的なものをまとめてみる。

森田(1989:643)では「～出す」の意味として、次のようにまとめている。

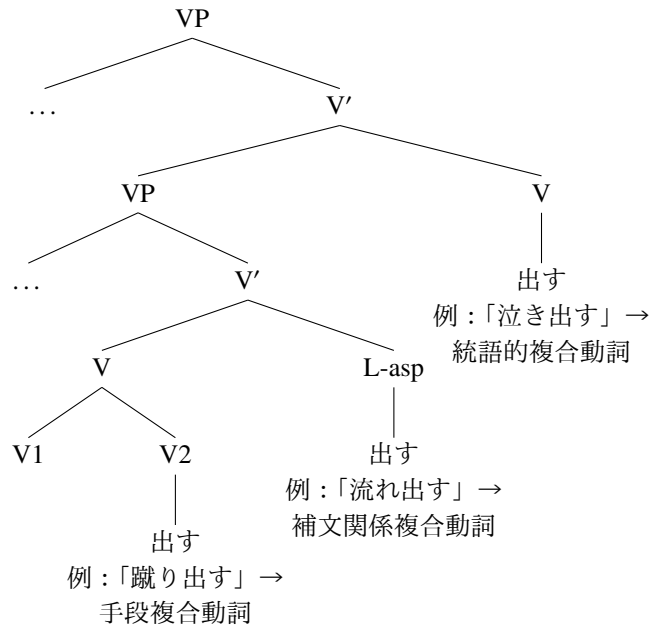
- ①中にある事物を外側へ、表面の方へ移し現れるようにする意から、②新たな状態を発生させる意へと発展しそこから③新たに事が始まる意味へと転じている。

姫野(1999:96-97)

「出す」の基本的意味である「外部への移動」は「開始」の場合にも意味の根底において引き継がれ、連続している。内部に込められていたものが、何らかのきっかけでどっと外部に出て、事が始めるという事態は容易に想像されることである。そこには人為的な力の作用と言うよりは、内部からあふれた自然なエネルギーの流出が感じられる。実際のところ、「～出す」が「外部への移動」なのか、「動きの開始」なのか区別のつきかねるような、中間的な性質を持つ物もある。

その中間的な例として「走り出す」をあげている。それでは実際の用例をコーパスで確認してみる。

図 4: 陳 (2012:36) による統語的複合動詞と語彙的な複合動詞の構造



- (6) 「よし、見とれ」勝治は昂然と肩をそびやかさせた。「約束したさかいな。こないだ、お返ししたるって」橋からはゆるい下り坂になっている。勝治はいきなり走り出して(=走り始めて)、一瞬のためらいも見せず門の中に入って行った。(山本音也『抱き桜』小学館 2005)
- (7) 宿の主人に、遠山家までの道程と行き方を教えてもらい、急ぎ足でバス道路を進行方向に向かった。ほどなく教えられた三差路へ出た。白山登山口ではない方に上れ上れば、待望の遠山家がある。胸を躍らせて坂道を上り始めた。すると空が暗くなり、雷鳴がし始めた。降らないうちにと走り出した(=走り始めた)が、間に合わず大粒の雨が落ちてきた。(秋野沙夜子『熟年夫婦の味わい』杉並けやき出版; 星雲社 2005)

これらの例は「走り出した」は、「走ることを始めた」という開始の aspekto として解釈すれば、統語的複合動詞であるし、「走る」という状態で「出る」という位置変化を引き起こしたと解釈すれば、語彙的複合動詞になる。

姫野(1999)では「走り出す」だけを上げていたが、「歩き出す」「動き出す」「溢れ出す」「流れ出す」のように V1 が移動の様態として解釈できるものは他にも見られた。

陳(2012)では語彙的複合動詞「～出す」について、「位置移動」しか取り上げていないが、この他に「顕在化」という意味を持っているが知られている。これらは、対象を外

部や表面に出現させることで、隠れていた物が取り除かれて姿を現す。見えないものが見えるようになるという状態変化を引き起こすが、位置変化は起こさない。姫野は「顕在化」の下位分類として、「顕現」「創出」「発見」の3つがあるとし、それぞれ次のような例を挙げている。

姫野 (1999:93-95) から抜粋

【顕在化】

- A) 顕現…暴きだす、さらけだす、むきだす、あぶりだす、削り出す、照らし出す、映し出す、思い出す
- B) 創出…作りだす、考えだす、生みだす、編みだす、織りだす、染めだす、描きだす、ひねりだす
- C) 発見…見つけだす、探しだす、探りだす、調べだす、聞きだす、嗅ぎだす、洗い出す、割り出す

本動詞「出す」は他動詞であり、「A が B を 出す」という構造を取る。本動詞「出す」は対象の位置移動を表しており、複合動詞「～出す」になった時にも「位置変化」という意味を保持している。複合動詞後項「～出す」は自動詞にも他動詞にも付くことができる。「～出す」が他動詞に付くと対象の位置変化になるが、自動詞に付くと主体の位置変化となる。また、位置が変わるということは、一種の状態変化である。対象 y の中から外への位置変化が引き起こされ、見えないものが見える状態に変化した意味を持つようになると、姫野で顕在化と呼ばれる「状態変化」の意味を持つようになる。

この「状態変化」は変化前の状態が含意された場合、「状態変化」になるが、それが含意されない場合、新たな事態の発生を表し、「開始のアスペクト」となる。

<語彙的複合動詞>

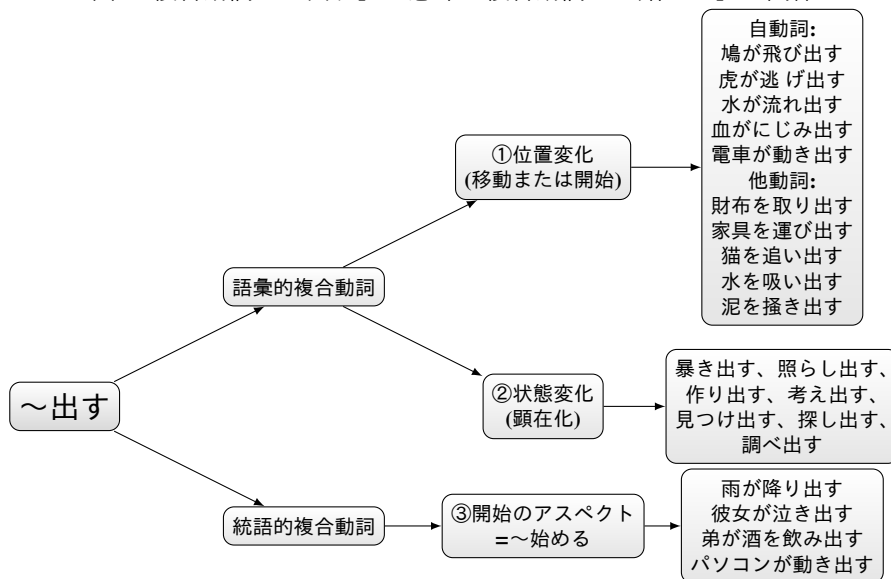
- ① 中にある事物を外側へ、表面の方へ移し現れるようにする「位置変化」の意味
- 例：太郎がボールを外に蹴り出した（他動詞＋～出す）対象の移動
太郎がいきなり走り出した（非能格自動詞＋～出す）主体の移動
- ② 新たな状態を発生させる「状態変化（＝顕在化）」の意味
- 例：山中教授が iPS 細胞を作り出した（他動詞＋～出す）

<統語的複合動詞>

- ③ 新たな事態が始まる意味「開始のアスペクト」
- 例：太郎が本を読み出した（他動詞＋～出す）
赤ちゃんがよちよちと歩き出した（非能格自動詞＋～出す）
桜が枯れ出した（非対格自動詞＋～出す）

影山のフレームに照らし合すると、①「位置変化」と②「状態変化(=顕在化)」が語彙的複合動詞になり、③「開始のAspect」が統語的複合動詞となる。これらのことをまとめると、複合動詞「～出す」は以下のような体系になっている。そして「～始める」と意味が共通するのは統語的複合動詞で開始のAspectを表す③の部分である。

図 5: 複合動詞「～出す」の意味と複合動詞「～始める」の関係



影山のフレームにおいては、語彙的複合動詞と統語的複合動詞は生成部門の違いにより、明確に区別されるものとされているが、姫野(1999)が「走り出す」を例にとって、指摘しているように、これらには「変化」をキーワードとした連続性が感じられる。「～出す」が文法化されることに伴って、意味の変化を起こしていくとするならば、これらが連続していることは自然なことのように思われる。ただ、今回は「～出す」と「～始める」の違いに焦点を当てるため、動詞の文法化については深くは触れないことにする。

4. 「～出す」と「～始める」の違い

「～出す」と「～始める」は統語的複合動詞で、両方とも開始、あるいは始動のAspectを表すとされているが、この両者の違いはどこにあるのだろうか。

まず、先に挙げた新美他(1987:73-74)『外国人ための日本語 例文・問題シリーズ④ 複合動詞』では「～出す」と「～始める」の違いについて以下のように述べられている。

補助動詞として、「～はじめる」は「ある時を境に、はっきりとその状態になり、その状態や行為が続く」ことを、「～出す」は、「時間的にある動作、状態が開始、発生する」ことを表す。

また、この2つの特徴としてお互いに言い換えがきく場合が多いとしている。その意味の違いとして、「はじめる」は「始→続→終」という1つの過程の第一段階であることを、「だす」は突然、予期しない新事態が発生するということを表すとしている。姫野(1999:98-101)では「～出す」と「～始める」の違いとして、次の7つの点をあげている。

- ① 感情を表す語は「～出す」の方が適している
- ② 不測性を強調する場合は「～出す」の方が適している
- ③ 音の自然発生を表す場合は「～出す」の方が適している
- ④ 「今にも～しそうだ」という現実化直前の様相を表す表現で、自然現象の場合は「～出す」の方が適している
- ⑤ 表現上のニュアンスとして、即興性やエネルギーの爆発等が強調される場合は「～出す」の方が適している
- ⑥ 「～出す」は意志表現にそぐわない
- ⑦ 形態上の制限から前項に「出す、始める」が来る場合は、同音反復をさける。

「～始める」は広く様々な動詞につくことができるため、①～⑥は「～出す」を使うのに適した条件になっている。ここでは7つ独立した違いが立てられているが、相互に関連しているものもあるため、これらを「～出す」と「～始める」の違いを明らかにするという点から、形態上の問題である⑦を抜き、以下の3つの観点にまとめて議論していく。

- (1) 感情を表す語は「～出す」の方が適している→①
- (2) 「～出す」は「突然性」「不規則性」「即興性」を含意しやすく、音や自然現象を表すのに適している。→②、③、④、⑤
- (3) 「～出す」は意志表現にそぐわない→⑥

それでは、先行研究の中で指摘されている「～出す」と「～始める」の違いを見ているしながら、順に「現代日本語書き言葉均衡コーパス(通常版)中納言 BCCWJ-NT」で検証していく。

(1) 感情を表す語は「～出す」の方が適している

姫野(1999:97)では、自然現象のうち「笑う、泣く」には「～出す」がつくが「～始める」はつかないこと述べている。それと同じような記述として、名柄編(1987:74)では、過程のはっきりしない感情を表す動詞の「笑う」「あわてる」「怒る」などには「始める」はつきにくいことを述べている。そこで、それらが本当に正しいのか、コーパス中納言を使って実例を確認してみる。

検索方法としては「笑い出す」ならば「ワライダス」という「音素読み」で検索をかけ、「笑い出す」「笑いだす」「わらい出す」「わらいだす」のすべての表記を取り扱う。同時に、「笑い出した」「笑い出している」「笑い出している」のように、その動詞が取り得るすべての活用形も検索対象に含む。

先行研究で感情を表す動詞につきやすいと指摘されているため、「笑う」「あわてる」「怒る」に加えて、感情を表していると思われる「喜ぶ」「悲しむ」「楽しむ」「苦しむ」をコーパスで調べてみると、次のような結果となった。これらはコーパスに登録された1億430万語から抽出されたデータである。

図 6: 感情を表す動詞と「～出す」と「～始める」

	～出す	～始める
笑う	405 例	29 例
あわてる	13 例	6 例
怒る	176 例	67 例
喜ぶ	1 例	0 例
悲しむ	0 例	0 例
楽しむ	2 例	5 例
苦しむ	15 例	12 例
痛がる	0 例	0 例
あきれられる	0 例	0 例
うろたえる	1 例	0 例

これをみると、感情を表す動詞につきやすいとされながらも、「笑い出す」「怒り出す」以外の動詞は「～出す」であっても「～始める」であっても、全体的に用例数が少ないことがわかる。それでは、「～始める」は0例にもかかわらず、「～出す」が1例だけ観察された例について確認する。

まず、「喜ぶ」は「喜び出す」1例、「喜び始める」0例であった。その1例をあげておく。

- (8) 「借金取りは余都老爺が癩癩を起こされたので、怖がって逃げてしまいましたよ」と余荘児は顔色ひとつ変えずに言う。これはまさに“含みのある皮肉”というもので、余誠格は怒るどころか喜び出し、余荘児の顔をひとつまみして出て行こうとした。(高陽(著)/永沢道雄(訳)/鈴木隆康(訳)『西太后』朝日ソノラマ 1995)

次に、「うろたえる」は「うろたえ出す」1例、「うろたえ始める」0例であった。その1例をあげておく。

- (9) キキッ、キキッとみじかく鳴きかわし、サルどもはあきらかにみんなのほうへ近づいてくるようすだ。「あいつらも、ここで雨やどりするつもりかな」光彦がいった。「そうだとしたら、たいへんだわ」すみ子がとたんにうろたえだし、「みんないそいで、そこの押し入れにかくれよう。はやく、はやく」とせきたてた。(吉本直志郎『きょうも朝から夏やすみ』佼成出版社 1990)

ここで確認しておきたいのは、コーパスに存在しないから言えないと主張するわけではないことである。ただ、用例数が少ないということは、自然な状況下で、それを使う状況があまりないことを表している。ここから分かることは、従来の研究で指摘されていたこととは違って、感情を表す動詞ならば、何でも「～出す」がつくわけではないということである。反対に、感情を表す動詞はどちらかといえば、「～出す」も「～始める」も付きにくいことがわかる。感情を表す動詞が、過程性 [+ process] を取りにくいと考えるのならば、これは寧ろ、自然な結果である。

そこで、改めて、用例数が多い「笑う」「怒る」を見ると、感情を表すというより、感情に付随して起こりやすい動作であって、形容詞のように純粋な感情を表しているわけではない。「悲しい」と感情を持っていると、「泣く」事態がおこりやすいが、「泣く」そのものが感情を表しているわけではないのである。それでも、用例数から「笑う」には「～始める」より「～出す」が付きやすいのも事実である。そこで、「～出す」と「～始める」の違いを確認するために、「笑い出す」と「笑い始める」を検索してみると、同じコンテキストで両方の形式が表れている文が見られた。

- (10) 彼女は突然堰をきったように笑いだした。よほどおかしかったのだろう、しだいに胸を波打たせて笑い始めた。(川上健一『翼はいつまでも』集英社 2001)
- (11) おっと思い声をかけてみたが、すでに狂っていた。何を言っても通じない。突然、笑い出す。俯いて、辺りをきよろきよろと見回す。また、笑い始める。(尾川正二『帝国陸軍の教育と機構』2003)

これをみると「笑い出す」にはどちらも副詞「突然」が共起している。「～出す」が急な予期しない新事態の発生を含意する「突然性」を持っていることは、多くの先行研究で指摘されている。

- (2) ～出すは「突然性」「不規則性」「即興性」を含意しやすく、音や自然現象を表すのに適している。

それでは、「突然性」をもったものは必ず「～出す」が選択されるのだろうか。確かに「～出す」は「突然」「急に」「急激な」といった副詞と相性がいいのはデータとしては事実である。しかし、その「突然性」は「～出す」だけの専売特許的な特別な意味要素ではない。「～始める」にも「急速に」「突然」といった、「突然性」を表す副詞をつけることができるからである。

- (12) 千九百八十六年以降、原油価格は一挙に十ドルもの暴落となり、一バーレル＝十六ドル程度まで低下した。このいわゆる“逆石油ショック”によりテキサス州をはじめとする南西部における石油産業は激しい打撃を受けた。そのため石油・ガス掘削業雇用者数は千九百八十二年をピークに急速に減少しはじめた。(宮崎義一『複合不況』中央公論社 1992)

- (13) しばらく二人は黙ったまま、目の前の建物の壁を見ていた。それから突然、イスマイルは自分の側の事情を早口で喋りはじめた。(池澤夏樹『バビロンに行きて歌え』新潮社 1990)

また、逆に「～出す」が表す事態がゆっくりと実現されたことを表す副詞と共に起る例も見られる。

- (14) ときたま見えるのはニッパヤシの小屋か洋館だけである。陽はないが、すでに風のなかに熱帯のなま温かさが滲んでいる。煙草を喫い終ると、英世はゆっくりと歩き出す。(渡辺淳一『遠き落日』角川書店 1979)

- (15) 結婚式は、真昼に行われた。新郎新婦の、神々への宣誓が済んだころ、黒雲が空を覆い、ぽつりぽつり雨が降りだし、やがて車軸を流すような大雨となった。(宮地裕ほか『国語2』光村図書出版株式会社 2005)

ここで、冒頭の新美他(1987)『外国人ための日本語 例文・問題シリーズ④ 複合動詞』の問題を振り返ってみると、「～出す」は突然、予期しない新事態が発生するとしながらも、その練習問題として作られた問題⑩は「突然」がついているのに、答えでは「揺れ出す」ではなくて「揺れ始める」が正しいとされている。

- (16) 突然家が揺れ始めてびっくりした。自身は初めての経験だったから、すごく怖かった。

つまり、「突然性」を含意しやすいかどうかは、あくまでも傾向の話であって、どちらかが非文になるような絶対的なルールではないのである。このような事情のため、「～出す」と「～始める」は開始のアスペクトを表すものとされながらも、その使い分けに関して、未だ明確なルールを見いだせないままになっている。

陳(2012:63)では「～出す」の突然性を「SUDDEN START」と設定し、「～出す」のLCSとして以下のようなものを想定した。

アスペクトの「～出す」:

[BECOME [[LCS1] BE AT-SUDDEN START]]

このようにアスペクトの「～出す」が「SUDDEN START」という、LCSを持っているならば、14や15のような例は非文になるはずが、実際はそうはならない。そこで、先行研究で述べられているように「～出す」が「突然性」「不規則性」「即興性」を含意しやすく、音や自然現象を表すのに適しているかを確認するため、音や自然現象を表す開始のアスペクト「～出す」の例をあげてみる。そして、それを「～始める」と比較してみる。対象とするのは「電話が鳴る」「風が吹く」「(植物)が枯れる」である。

<電話が鳴る>

「電話が鳴り出す」 14 件

「電話が鳴り始める」 7 件

電話が鳴るに関しては「電話が鳴り出す」「電話が鳴り始める」の両方の形式があったが、「鳴り出す」の方が優勢である。

- (17) さて、のんびりと石ケンを使って、泡に埋まろうか、とお湯をためていると、電話が鳴り出した。ベッドの方に電話があるのだが、浴室にも受信専用の電話がある。
(赤川次郎『愛情物語』角川書店 1983)
- (18) 電話が突然鳴り出すと、河合勝三はギクツとして、一瞬、心臓の縮むような思いをした。電話というのは、たいてい突然鳴り出すものと相場が決まっているが、河合はその都度神経を針で突つかれるような気がして「電話のベルはもっと柔らかい、穏やかな音にするべきだ」と、NTTにあてて投書してやろうと決心するのだった。(赤川次郎『親しき仲にも殺意あり』集英社 1990)
- (19) 講義の最中に、学生のかばんの中の携帯電話がくぐもった音で鳴り始めた。私は一瞬にして気分をそがれ、次の言葉を忘れてしまった。(波多江伸子『ネコ型のすきま』木星舎 2001)

<風が吹く>

「風が吹き出す」 15 件

「風が吹き始める」 26 件

「風が吹く」に関しては、「吹き出す」と「風が吹き始める」の両方の形式があったが、「吹き始める」の方が優勢だった。また、同時に21のように「吹き始める」に「突然性」を表す副詞がつくものも見られた。

- (20) 夕食の仕度を始めたが、石油コンロがまた壊れた。残りの一台を使って何とか食事はとれたが、やはりコンロをうまくあやつるコックがぜひとも必要だ。寝袋にくるまっていると、強い風が吹き出した。日のあるうちは川のほうから吹いていた風が、夜になると逆に山から吹きおろすようになる。(佐藤健『マンダラ探険』中央公論 1988)
- (21) 目指すミーランの遺跡に着いたのである。私たちが車を降りると同時であった。それまでほとんどなかった風が、突如吹きはじめたのである。猛烈な風であった。(作者不明『シルクロード糸綱之路』日本放送出版協会 1980)

言うまでもないことだが、コーパスで「風が吹き出す」で検索をすると、22のように位置変化を伴う例も見られるが、そのような例は排除し、純粹に開始のアスペクトを表すもので比較している。

- (22) 溶岩トンネルで知られるのは、九州五島の福江島、八丈島西山など、ごく一部の、限られた地域にすぎない。風穴の多くは、冷風を吹き出しているが、これは、地下で冷やされた空気が重くなって、下降気流が生ずるためと言われる。(富士自然動物園協会編『富士登山ハンドブック』自由国民社 2001)

< (植物) が枯れる >

「枯れ出す」 5件

「枯れ始める」 9件

「(植物) が枯れる」に関しては、「枯れ出す」「枯れ始める」の両方の形式があったが、「枯れ始める」の方が優勢である。「植物が枯れる」は非対格自動詞であり、まさに自然現象を表すものであるので、「枯れ出す」の方が多く現れると予測したのであるが、実際には「枯れ始める」の方が多く見られた。

- (23) 七月初めの梅雨の頃でした。そろそろ花の咲き始めた頃でした。そしたら、葉が急に枯れ出して、花も葉も半分は落ちてしまったんです。七月の初めに、葉が枯れ落ちるなんて、そんなことありませんでしょう。(山本武臣『あじさいになった男』コスモスヒルズ 1997)

- (24) 植物は鉢内の温度が三十℃を超えると、大きなダメージを受けます。植物の葉が黄色っぽく変化したり、葉先が枯れ始めたりしているのを見かけたことはありませんか。(星野 洋一郎(著)/木村 和史(著)/矢澤 秀成(著)/草場 貞門(著)『趣味の園芸 (NHKテレビ放送テキスト)』日本放送出版協会 2005)

それでは、なぜ、「～出す」は「突然性」「不規則性」「即興性」というニュアンスを含意しやすいのだろうか。また、音や自然現象を表すのに適しているは何故だろうか。「～出す」と「～始める」の違いである「(1)感情を表す語は「～出す」の方が適している」や「(2)「～出す」は「突然性」「不規則性」「即興性」を含意しやすく、音や自然現象を表すのに適している」というのは傾向や程度問題であって、どちらかが非文になるような絶対的な不適切さをもっているわけではない。もっと明確な文法性判断の差を持ったものについて、次の(3)で述べる。

(3) 「～出す」は意志表現にそぐわない

新美他(1987)でなされた重要な指摘としては、意志動詞についての場合でも「～出す」が付加されるとその動作が無意識になされた事という意味合いをおびることがある。そのため、相手に動作を依頼する形式「～てください」がつくと、25は言えるが26は言えないとしている。

- (25) 食べ始めてください。

(26) *食べ出してください。

また、今井(1993)でも、「～出す」が命令形になるとやや不自然になることを指摘している。基本的に「～出す」は命令形とは相性が悪いのであるが、その中でも動詞によって差があることを池谷(2002)で指摘した。

(27) *早く食べ出せ

(28) ピストルがなったら、走り出せ

(29) 合図があつたら、歌い出せ

池谷(2002)では、それを更に検証し、「～出す」と共起する V1 動詞が限界性[+ delimited]を持つ場合、命令になりにくいことを証明した。「～出す」が命令形になりにくいなか、「限界のない非能格自動詞」の場合、命令形を許容するものが多い。

<限界のない非能格自動詞>

(30) a. 歩き出せ

b. 歩き始めろ

(31) a. 走り出せ

b. 走り始めろ

(32) a. 踊り出せ

b. 踊り始めろ

(33) a. 動き出せ

b. 動き始めろ

一方、同じ非能格自動詞でも、限界性があるものは、例えば人間が主語であっても命令形にできない。しかし、これらは「～はじめる」ならば、動作主に働きかけて命令形にすることができる。

<限界のある非能格自動詞>

(34) a. *早く座り出せ

b. 早く座り始めろ

<非対格自動詞>

(35) a. *早く痩せ出せ

b. 早く痩せ始めろ

他動詞文は動作主をもつものがほとんどであるが、それでも命令形とはそぐわないものが多い。特に限界性[+ delimited]を含意すればするほど、許容度が下がる。

[-delimited] 水を流す > 本を読む > 論文を書く > ケーキを作る [+ delimited]

＜他動詞＞

- (36) a. ?すぐに水を流し出せ
b. すぐに水を流し始めろ
- (37) a. ??すぐに本を読み出せ
b. すぐに本を読みはじめろ
- (38) a. *すぐに論文を書き出せ
b. すぐに論文を書きはじめろ
- (39) a. *すぐにケーキを作り出せ
b. すぐにケーキを作りはじめろ
- [+ delimited]

このような事象から、池谷（2002:195）では「～出す」と「～始める」の違いを次のように定義している。その表をもう一度まとめ直す。

図 7: 「～出す」と「～始める」の違い

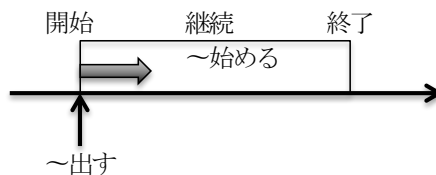


図 8: 「～出す」と「～始める」の違い

～出す 例	雨が降り出す	～始める 例	雨が降り始める
<ul style="list-style-type: none"> ● 運動が開始した瞬間の局面を表す ● 「雨が降っていない」状態から「雨が降る」状態への変化・生起、つまり、それまで存在しなかった新たな状態が起こったことを表す ● その運動が継続して行われるかは含意しない 		<ul style="list-style-type: none"> ● 「始-続-終」という一連の運動の開始を表す ● 運動全体から計算した最初の部分を表す ● その運動は継続して行われることが期待されている 	

つまり「～出す」は開始した瞬間の局面のみを表すため、動詞の終わりが視界に入っている限界性 [+ delimited] を持った動詞について、意味的に矛盾するため命令形にしにくいという現象として現れる。

これ以外にも池谷 (2012) では次のような現象を取り扱った。

- (40) 車が動き出した
=車が動き始めた
- (41) *飛行機が飛び出した
=飛行機が飛び始めた

先に「～出す」は限界性がない動詞につくと定義したが、41「*飛び出す」などは一見その反例のように見える。これをどのように扱ったらいいのだろうか。それには未完了の逆接 (imperfective paradox) が鍵となる。未完了の逆接 (imperfective paradox) について、池谷 (2002) では次のように述べている。

池谷 (2012:198)

「～出す」は活動動詞と相性が良いが、それは活動動詞が動作が始まった瞬間に事態が成立するという未完了の逆接 (imperfective paradox) をもっていることに起因する。つまり、起こった瞬間にすべてが成立しなければならないのであるが、活動動詞の中にはその事態が成立すると認識されるまで、物理的に時間がかかると認識されるものがある。ここでいう「時間がかかる」というのは文法の問題ではなく、現実の物理的世界に対する認識の問題である。「～出す」は開始の局面しか表さないので、このような開始した瞬間に成立したと認識されない動作とはなじみにくいのである。

これを簡単に書き表すと次のようになる。

- (40') 車が動き出す
A【車が動いていない状態】→B【車が動いている状態】
- (41') 飛行機が飛び出す
A【飛行機が止んでいない状態】→B【飛行機が飛んでいる状態】

「～出す」が付くためには A → B という状態変化が瞬間的に成立することが必要である。「車が動く」は車がちょっとでも動いた瞬間に「車が動く」という動作が完成し「車が動いた」と認定される。「雨が降る」は雨がポツッと落ちてきた瞬間に「雨が降った」と認定される。

それに対して「飛行機が飛ぶ」は飛行機が離陸して、一定の高度まで上がっていき、そこから水平飛行に入るため、A → B への状態変化にいたるまで、時間がかかる。よって、動詞の成立まで時間がかかると解釈されるものは、単一事象の開始を「～出す」で表しにくい。そのような場合は全体の中の開始部分を表す過程性 [+ process] を持つ「～始める」の方が選択される。

この他の理由として、「飛び出す」が言いにくい要因としては、「飛び出す」は「子供が道から飛び出した」のような位置変化を表す語彙的複合動詞の用法を持っていること

が考えられる。そのため、紛らわしさを回避するため、開始のアスペクトを表す場合は、「飛び始めた」の方が好まれるという可能性も想定される。

先行研究でも「～出す」が「突然性」と相性が良いことはしばしば指摘されているが、この A【運動が起こっていない状態】→B【動作が完成した状態】の変化が、開始の局面で瞬間的に成立するため、突然、起こったような意味を含意しやすいのである。そこから感じられる「突然性」「即興性」「不規則性」はあくまでも副次的な効果であって、本質的な意味ではない。そのため、前にあげた 14 や 15 の例が可能になる。

- (14) ときたま見えるのはニッパヤシの小屋か洋館だけである。陽はないが、すでに風のなかに熱帯のなま温かさが滲んでいる。煙草を喫い終ると、英世はゆっくりと歩き出す。(渡辺淳一『遠き落日』角川書店 1979)
- (15) 結婚式は、真昼に行われた。新郎新婦の、神々への宣誓が済んだころ、黒雲が空を覆い、ぽつりぽつり雨が降りだし、やがて車軸を流すような大雨となった。(宮地裕ほか『国語 2』光村図書出版株式会社 2005)

「～出す」が表していることは、A【何もない状態】→B【動作が完成した状態】への状態変化と、運動の開始局面で成立である。「歩く」は、1 歩でも歩けば動作が成立するので、「ゆっくりと歩き出した」は可能であるし、「雨が降る」は一粒でも降れば動作が成立するので、「ポツリポツリと雨が降り出した」のような例が可能になる。それに対し「～始める」は開始の方法に指定がない。そのため、「～始める」はその動詞全体の開始部分と解釈されれば、色々な動詞と共起することができる。

これまでの議論をまとめると、以下のようなになる。

「～出す」と「～始める」の違い①

「～出す」は動詞が開始した瞬間の局面のみを表し、限界性を含意しないという [-delimited] という性質をもつ。一方で「～始める」は動詞が表す事態全体の中における、開始部分を表すため過程性 [+ process] という性質をもつ。「～出す」と「～始める」の使い分けには、この動詞の過程性と限界性が関わっている。

先に「～出す」は依頼形や命令形と相性が悪いことを述べた。それに加えて、「～始める」は動作動詞と同じくル形で意志未来を表す事ができるが、「～出す」はル形で意志未来を表すことができない。

- (42) a. *明日から ECC で英語を勉強し出す (ル形)
b. 明日から ECC 英語を勉強し始める
- (43) a. *これからピアノを弾き出す (ル形)
b. これからピアノを弾き始める
- (44) a. *さあ、皿を洗い出そう (意向形)
b. さあ、皿を洗い始めよう

- (45) a. *お父さん、帰って来ないから先に食べ出そう（意向形）
 b. お父さん、帰って来ないから先に食べ始めよう

その一方で、動作主性がない自然現象を表す表現では、「～出す」は「～始める」と同じように近接未来を表すようになる。

- (46) a. もうすぐ桜が咲き出す
 b. もうすぐ桜が咲きはじめる
- (47) a. 明日から雨が降り出す
 b. 明日から雨が降りはじめると

ここから導かれることは「～出す」は、命令形、依頼形、意向形、意志未来を表す事ができないことから、意図を持った表現とはなじみにくいことがわかる。つまり、「～出す」は意図性を含意していない。しかし、これは、「財布を落とす」や「穴にはまる」のように、動作主が望んでいない動作をうっかり行ってしまったという非意図性とは異なる。「～出す」で表される意図性のなさは、非コントロール性 [**-controllability**] と言い換えることができるその事態の招来について、何のコントロール力も持っていないことを表している。そのため、それが起こるのを外から眺めているような、一種、傍観者のような表現効果を生む。そのため、たとえ自分自身の動作であっても、43(a)「*これからこれからピアノを引き出す」のような意志未来に使うことができない。

それでは、なぜ、「～出す」は意図性と相性が悪いのだろうか。

その理由として「～出す」が表す事象が A【動詞がない状態】→ B【動作が完成した状態】の状態変化を表しているところにあると考える。「～出す」が表す事態は、動作主が意図をもって始めた事態ではなく、状態の変化を表していると考えられるのである。それはある意味、客観的な事態の描写であり、何も無いところに新たに生起した新しい事態の描写である。その「～出す」がもつ非コントロール性 [**-controllability**] という性質のため、たとえ、動作主が存在する事態であっても、意図を表す命令形、依頼形、意向形、意志未来となじみにくいのである。

それに関して今井（1993:6）も「～出す」は「知覚するだけであり、事態に対する制御力をもっていないため、命令・意志・使役の文脈ではあらわれにくい」と述べている。

このような「～出す」の性質のため、「～出す」は人間ではないもの（自然物）に付きやすく、動作主のいる動作についてのものであっても、客観的に見た動作や、無情物の動作であることが多い。そのため、「～出す」は1人称を主語とする文で用いられることは少ない。

「歩き出す」という複合動詞は、コーパス中納言の中で 958 例現れる。その中で、明確に一人称を取るものは、「私」2例、「あたし」1例、「僕」4例、「俺」2例、であった。その例をあげておく。

- (48) 精一は先に車から降りて、頭を振り振り、外で家造りを手伝ってくれていた大工のジェオリーのところへ行った。二人してこっちを見て笑った。なんていやな日本人！ もういい、ここまで馬鹿にされて運転なんかできない。わたしは精一に向かってなにやらめくと、車をその場に捨て、七絵の手を引き、ハイウェイの路肩を古い家に向かって歩き出した。(すずきひさこ『ママは陽気なアラスカン！』文芸社 2002)
- (49) 僕は金本の反応が、僕に対する憤りに根ざしているのだと解釈すると、途端に気持が軽くなり、ゆっくり足を頼みしめながら山の麓の部落に歩き出したのだった。(梶山季之『李朝残影』インパクト出版 2002)

山崎(1995:97)では、「～出す」は継起的な結びつきを表す「～すると」と結びつきやすいことを指摘しているが、48と49の例もその特徴に合致している。このように、限界のない動作動詞「歩く」に付いていたとしても、「歩き出す」はその文全体で、背景や状況を表す文になっている。

「～出す」と「～始める」の違い②

「～出す」は動作主が意図をもって始めた事態ではなく、外から観察された開始の状態変化である。そのため、「～出す」は非コントロール性 [-controllability] という性質をもち、命令形、依頼、意向形、意志未来をとりにくい。それに対して、「～始める」は意図的に運動を開始できるコントロール力を持つ。つまり、「～出す」と「～始める」の違いには、動作主のコントロール性 [controllability] が関わっている。

5. まとめ

最後に、従来、開始のアスペクトを表す「～出す」「～始める」の違いとして、「突然性」を中心として説明が与えられることが多かった。しかし、本研究では、「～出す」はA【何もない状態】→B【動作が完成した状態】の状態変化を表しているところにあると考えた。そして、「～始める」は動詞が表す事態全体の中における、開始部分を表すため過程性 [+ process] という性質を持っているのに対して、「～出す」は動詞が開始した瞬間の局面のみを表すとした。

先行研究で指摘されている「突然性」は急に状態が成立したことから生まれる副次的な意味である。また、「～出す」が付く動詞は限界性を含意しない非限界性 [-delimited] という性質をもち、V1に限界性をもつ動詞を取りにくい。このように、「～出す」と「～始める」の違いには、動詞の限界性が関わっていることを明らかにした。

そして最後に、「～出す」が命令形、依頼形、意向形となじまない現象ことから、「～出す」は、動作主が意図をもって始めた事態ではなく、外から観察された開始の状態変化であると考えた。「～出す」はたとえ動作動詞に付いた場合であっても、意志的に使う事ができず、事態に対するコントロール力を持たない。それに対して、「～始める」は意図的に運動を開始できるコントロール力を持つ。つまり、「～出す」と「～始める」の違いには、動作主のコントロール性 [controllability] が関わっている。

このように、開始のAspectを表す統語的複合動詞は事態の「限界性」と動作主の「コントロール性」という大きな2つの基準によって、選択されていることを証明した。そして、「～出す」「～始める」は、この2つの基準により二者択一的にどちらか1つが選択される場合もあるが、多くの場合は、「～始める」を使って、過程性がある一連の動作の開始部分を語りたいか、「～出す」を使って、何もないところに新たな事態が出現したことを語りたいかという、話者の事態の捉え方によって選択される。そのため、言い換えがきくものが多いのである。

参考文献

- 浅尾仁彦 (2007) 「複合語の生産性と文法的性質」『日本言語学会第134回大会予稿集』 pp.416-421.
- 池谷知子 (2002) 「複合動詞『～出す』と限界性」『KLS』22. pp.192-202. 関西言語学会
- 池谷知子 (2005) 「『～出す』テストはどうすることか」『KLS』25. pp.293-303. 関西言語学会
- 今井忍 (1993) 「複合動詞の旅性に関する認知意味論によるアプローチ—『出す』の起動の意味を中心にして—」『言語学研究』2. 京都大学
- 伊藤たかね・杉岡洋子 (2002) 『語の仕組みと語形成』英語学モノグラフシリーズ16巻. 研究社
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房
- 影山太郎 (1999) 『形態論と意味』くろしお出版
- 影山太郎 (2013) 「語彙的複合動詞の新体系—その理論的・応用的意味合い—」『複合動詞研究の最先端 謎の解明に向けて』ひつじ書房
- 陳劫憚 (2013) 「語彙的複合動詞と統語的複合動詞の連続性について—『～出す』を対象として」『複合動詞研究の最先端 謎の解明に向けて』ひつじ書房
- 寺村秀夫 (1985) 『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版
- 新美和昭・山浦洋一・宇津野登久子 (1987) 『外国人ための日本語 例文・問題シリーズ ④ 複合動詞』荒竹出版
- 長谷部郁子 (2013) 「複合動詞と2種類のAspect」『複合動詞研究の最先端 謎の解明に向けて』ひつじ書房
- 姫野昌子 (1999) 『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店
- 山崎恵 (1995) 「開始の局面を取り立てる局面動詞について—『～始める』『～出す』の用法比較—」『坂田雪子先生古希記念論文集 日本語と日本語教育』98. 三省堂
- 由本陽子 (2005) 『複合動詞・派生動詞の意味と統語』ひつじ書房

利用したコーパス

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese (BCCWJ))

『中納言』 (<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>)

Author's web site: <http://www.shoin.ac.jp/>

(受付日: 2017 年 1 月 10 日)